

鴻鷺於保於志登里異名溪鳴異物志

〔八雲御抄三下〕鴛鷺をしのけ衣定ひとりね池にすむ夫妻笄寄之うきね

〔藻鹽草十〕鴛鷺夫妻契合之祝物

をしの毛衣 鴛鷺のひとりねこれはこととさらひとりね也、然をかくいへるをしはかりてこひしきからん心也、つがはぬ  
鴛鷺池水につがはねをしの思心をとよめり是等みなかなしの心なるべし 池にすむ鴛鷺 鴛鷺のうきね うきねのとこ  
鴛鷺のなく かくれぬにすむ鴛鷺鳥のなく とびかよふ鴛鷺の羽風そばだていつまあらそひば  
のはげしき 玉もの床

〔日本釋名鳥〕鴛鷺 此鳥雌雄相をもひて、いとをしみふかき故名づく、上下を略せり、又崔豹古今注と云書に、此鳥雌雄はなれず、人其一を得れば、其一おもひて玄ぬる、今案するにおもひ玄ぬる故に、をしと名づけしにや、

〔東雅十七禽〕鴛鷺ヲシ略中陳藏器本草に據るに、此にいふヲシは、即鴻鷺なり、楊氏が説の如し、されど唐人の詩に、紫鴛鷺と賦せし則此物なれば、鴛鷺の字用ひむも、あしかるべきにもあらず、ヲシといふ義不詳、舜水朱氏も、チシは鴻鷺也、此國にして鴛鷺をば見す、本草綱目には鴻鷺形大子鶯と云ひしは、誤れるなりと云ひけり、東壁が鴛鷺の註を見ると、此に云ふヲシ鶯時に同じからず、藏器本草には、形小子鶯と見えたり、舜水の説誣ふべからず、此物の名は、上古の人は、其雌雄未嘗相離の義によりて、雄雌の音をもて呼びしなるべし、

〔宜禁本草坤〕鴨鷄 鹹平食肉患大風夫婦不和作臚私食之立愛主諸瘻疥癬酒浸炙熱傳瘡上此禽雌雄暫時不捨失其一則朝夕思慕憔悴而死、

〔庖厨備用倭名本草十〕鴛鷺 倭名抄ニヲシ、多識篇ニヲシドリ、考本草、一名匹鳥鳥類也、南方湖溪ノ中ニアリ、土穴ノ中ニスム、大サ小鴨ノ如シ、其形杏黃色ニシテ文采アリ、紅頭翠鬣、黒翅黒尾、紅掌也、頭ニ白長毛アリ、是ヲ垂テ尾ニイタル、頸ヲ交ヘテフス、其交再セズ、元升井向曰、此說ヲ見レバ今俗ニ云ヲシドリハ鴛鷺ニアラズ、今云ヲシドリハ頭ヨリ尾ニ至ルホドノ白長毛ナシ、又